



# 平成20年度 郷土資料館特別展

## 「ジョセフ・ヒコ」

播磨町で生まれた「新聞の父」ジョセフ・ヒコが  
1858年にアメリカの市民権を得てから、今年で150周年となります。

### ⑧ 「自伝」より

ジョセフ・ヒコの業績の一つに、幕末から明治にかけての世相を日誌のように記録した「自伝」があります。伊藤博文などとの関係も描かれています。



▲今の古宮漁港

「あの美しい、陸地に囲まれた水域の東端」の港

#### 【ヒコ・クイズ】 自伝の原文は何語で書かれているでしょう

- ① 日本人に読んでもらえるように日本語
- ② 自分の気持ちを表現しやすい英語
- ③ 特定の人だけが読むようにオランダ語

ジョセフ・ヒコの「自伝」の正式な書名は、英語で「THE NARRATIVE OF A JAPANESE」直訳すれば「ある日本人の物語」となります。そして略称になりますが「自伝」といわれています。

これが出版されたのは、上巻が1891年、下巻が1895年です。当時、東京にいて執筆したと考えられます。内容は、まず生まれた地の紹介と古宮村や浜田町での思い出から始まります。そこから、1891年5月の大津事件、そして10月28日の濃尾地震までの記録です。

この間の思いを、一番表現しやすい英語で、日記のように記録しています。このおかげで、ジョセフ・ヒコの足取りと、心の変化が、年月日で押さえることができます。まさしく、ジョセフ・ヒコ研究の基礎となる本です。

ちなみに、この自伝の最初は、「私は日本帝国という島国に生まれた」から始まります。すでにここで、イギリスを意識しながらではあるが、日本を「島国」と客観的に表現しており、いかにも世界を見つめた人の文だとわかります。

一方、生まれた古宮については、(有名な瀬戸内海の)「あの美しい、陸地に囲まれた水域の東端」と描いています。帰省したとき、悲しい思いが出ができた地ではあっても、やはり心では、輝やく地であったことがわかります。

この点から、ジョセフ・ヒコは、この播磨町を全世界へ誇りをもって最初に紹介した人、ともいえます。

※引用文献『アメリカ彦蔵自伝』平凡社  
郷土資料館  
田井恭一



「自伝」に書かれた地

● クイズの答 ●

② 自分の気持ちを表現しやすい英語

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079 (435) 5000

絵ものがたり『ジョセフ・ヒコと洋式帆船の男たち』(播磨町ふるさとの先覚者顕彰会) 発売中2,500円



町の人口 10月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,281人(+9人)	男...16,803人(+5人)	世帯数...13,352(+5)
	女...17,478人(+18人)	